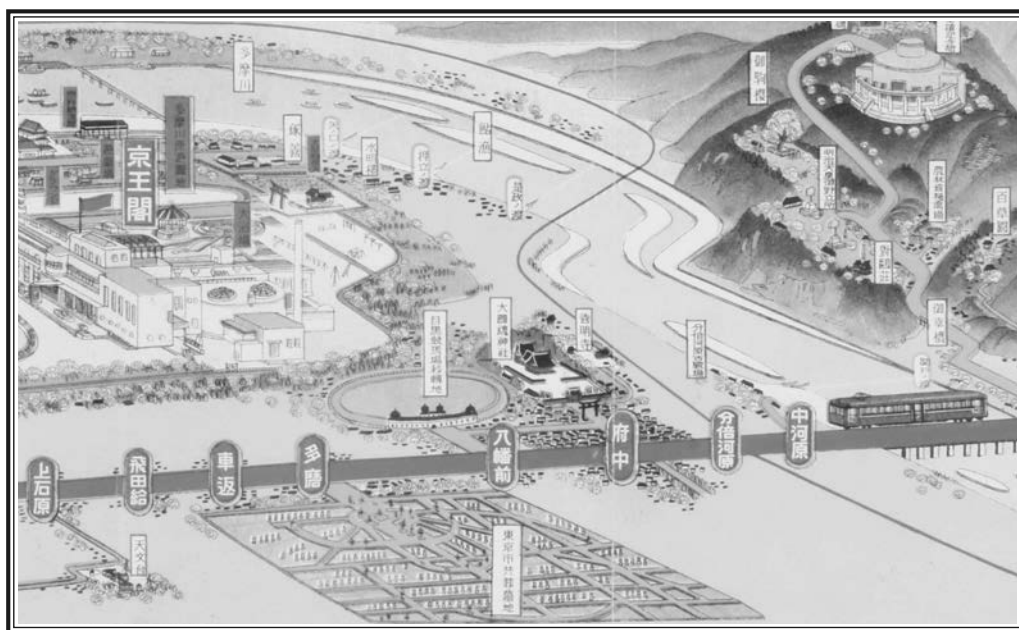


あるむぜお119

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 119

2017年3月20日



昭和初期の京王電車沿線案内

目次

1-2 祝！府中駅誕生 100 年

④鉄道の開通がもたらしたもの

3 最近の発掘調査

「丸」の屋号を記した磁器

4-5 ノート 国府八幡とは何か？

6 たまがわ野鳥セクション

④白の侵攻ーユリカモメ

7 展示会案内

企画展 戦国の府中

8 連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活

⑧道祖神の柱を立てる

祝！府中駅誕生 100 年

京王電車が新宿と府中の間に開通したのは、1916 年（大正 5）のことです。その時誕生した府中駅は、今年 100 歳になりました。この大きな節目に、京王電車の開通を軸に、府中の近代を振り返ってみたいと思います。

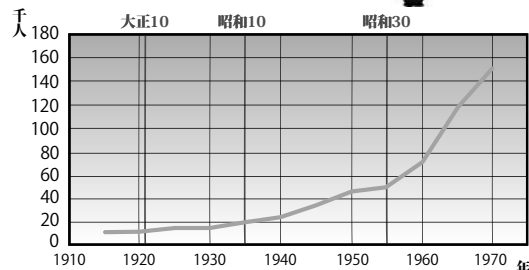
④鉄道の開通がもたらしたもの

写真の沿線案内にある「八幡前」駅は、今の東府中駅で、現在地より 500 m 西側にありました。この駅から上方に伸びた道の先には「目黒競馬場移転地」が見えます。また、今の多磨霊園駅である「多磨」駅から下方に向かう道は「東京市共葬墓地」（現 多磨霊園）につながっています。鉄道の開通により、府中にはこれらの大型施設が移設・新設されました。

祝！府中駅誕生 100 年

④鉄道の開通がもたらしたもの

府中の人口推移 



府中駅誕生 100 年を記念し、京王電車と府中をテーマとした本コーナーも、最後の回を迎えました。そこで締めくくりとして、鉄道の開通が府中にもたらしたものは何だったのか、ということを少し考えてみたいと思います。

現在府中市域を走るのは、京王線、J R 南武線・武蔵野線、そして西武多摩川線の 4 路線です。それぞれの鉄道の開通時期をみると、1916 年（大正 5）の京王電車を皮切りとし、翌年に西武多摩川線の前身である多摩鉄道が北多磨（現 白糸台）まで開通。多摩鉄道はその後、1919 年に常久（現 競艇場前）、1922 年に是政へと線路を延ばします。昭和になると、1928 年（昭和 3）に南武鉄道（現 J R 南武線）が、屋敷分（現 倍河原）まで開通し、この頃ほぼ府中の鉄道網は整ったと言えます。

J R 武蔵野線の開通は、1973 年を待たなければなりません。この路線は廃線となった下河原線の一部を受けついでいます。下河原線は、1910 年（明治 43）開通の東京砂利鉄道が国有化されたもので、長らく貨物しか運んでいませんでした。しかし 1933 年、府中に東京競馬場が移設されると、翌年から競馬の開催日に限り、国分寺～東京競馬場前まで旅客の運搬を始めました。

大正末期から昭和初期にかけて、東京競馬場のほかにも、大型施設や学校が府中に移設・新設されました。主なものに、1923 年の東京市共葬多磨墓地（現 多磨霊園）と明星実務学校（現 明星学苑）、1935 年の府中刑務所と東京高等農林学校（現 東京農工大学）があります。これらの設置が進められた要因には、交通網の発達と考えられます。膨張を続ける東京の受け皿となるに足る環境が、府中に整ったと言って良いでしょう。

また、アジア・太平洋戦争中には、1938 年に陸軍燃料廠、1940 年に日本製鋼所武蔵製作所、翌 1941 年に東京芝浦電気（現 東芝）の府中工場など、軍事施設や工場がつくられました。

このように、さまざまな施設が設置されると、府中に移住する人や、通学・通勤で訪れる人も増

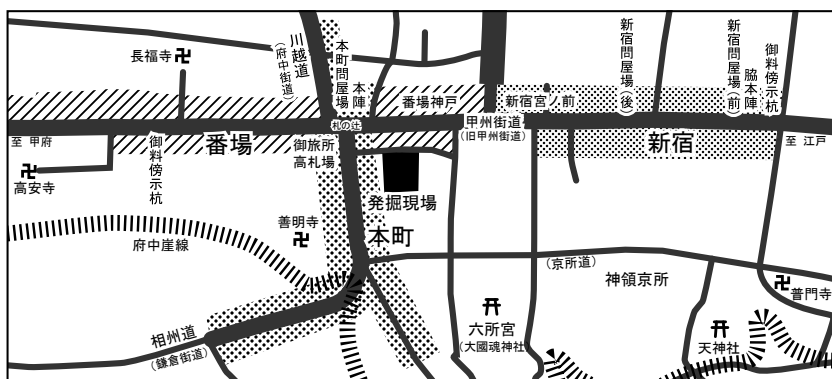
えています。上の図は、京王電車が開通した頃から高度経済成長期に至るまでの、府中市域の人口推移をグラフにしたものです。これを見ると、1920 年頃から緩やかに上昇をはじめているのが分かります。そして、企業の工場が設立されるようになった 1935 年頃から、増加率を表す曲線は、その角度を上げてきます。特に、高度経済成長期となる 1955 年以降は大きく上昇しており、この間、1963 年にサントリー武蔵野ビール工場（現 サントリー＜天然水のビール工場＞東京・武蔵野ブルフリー）、1964 年に日本電気（NEC）の府中事業所が開設されました。

現在の府中の人口は、約 258,000 人に近づき、1970 年の約 1.7 倍に達しています。都心までのアクセスが良い、住環境の整った街である証拠でしょう。そして、その契機となったのが鉄道網の発達であり、その先鞭をつけたのが、京王電車の開通だったのです。つまり、鉄道の開通がもたらしたものは、都心近郊の街として発展する新たな府中でした。

最後に、この「発展」について、僭越ながら私見を述べさせていただきたいと思います。明治時代以降、府中と同じような変化をたどった街は多数あるにちがいありません。そして、これらの街は皆「発展」の名のもとに、「都心近郊」という新しい顔を有することになりました。このマスクは、ややもすると画一的になりがちです。しかし、その下には、古くより積み重ねられた街の歴史があるのです。その歴史を踏まえたうえで、また新たな段階に移っていく、そんな変容を遂げていければ、街としてこれほど素敵なことはないのではないかと、考えています。（花木知子）

「丸」の屋号を記した磁器

宮西二丁目 府中市ふるさと文化財課 野田 憲一郎



府中宿と発掘現場の位置関係 ※郷土の森博物館ブックレット1 甲州街道府中宿 府中宿マップをもとに作成

旧甲州街道や府中街道沿いの発掘調査では、府中宿に関連した遺構や遺物が多く見つかります。そうした中で時おり出土する屋号を記した陶磁器は、文献史料に見られる店名と照合でき、出土地の具体的な性格を考えるうえで貴重です。今回は、市役所新庁舎の発掘現場で出土した、屋号のある磁器について紹介します。

新庁舎の発掘現場は、市庁舎の北側で、旧甲州街道から南に約 30 m 離れた場所にあります。街道沿いに建ち並ぶ宿場の建物の裏手にあたり、地下室や廃棄土坑（ゴミ穴）などの遺構が多く見つかっています。なかでも廃棄土坑からは、揃いの皿や、大皿、徳利や猪口、灯明具などがまとまって出土していることから、茶屋や旅籠屋の什器を廃棄したものと考えています。これらの陶磁器を水洗いするなかで、異体字の「丸」という文字を記した磁器が数点含まれていることに気付きました。文字は、皿・大皿・鉢などの底裏に釘書きという技法で共通して刻まれていることから、店の什器として屋号の一字を記したものといえます。

府中市史談会の市内屋号調査によると、宮西町 2 丁目に丸屋と出丸屋という店があったことがわかります。出丸屋は、文政 10 年（1827）出版の『甲州道中商人鑑』に出丸屋孝右衛門の名が出ていて、札の辻（旧甲州街道と府中街道の交差点）近くにある旅籠屋と紹介されています。また、天保 6 年（1835）の府中宿大火を記した「朱書府中宿絵図」には、札の辻から東へ 3 軒目の建物に孝右衛門の名が見られることから、そこが出丸屋の場所と判断できます。丸屋については、「朱書府中宿絵図」で、孝右衛門の南東向かいの弥兵衛という名が書かれた場所と推測しています。新庁舎発掘現場の近くからは「丸弥」と釘書きされた皿が出土していて、これは丸屋の字に弥兵衛の「弥」を当てたものと考えられるからです。

18 世紀末から 19 世紀半ばの頃には、江戸市中より名所旧跡に出かける風潮が高まり、一般庶民も行楽に出かけるようになります。発掘調査で出土した陶磁器の量をみても、この時期のものが比較的多く、府中宿が最も賑わったことを裏付けています。『甲州道中商人鑑』には、出丸屋より先が高幡不動尊など武蔵野名所への入口と紹介されています。発見された「丸」の磁器は、こうした行楽に訪れる客をもてなした食器だったのかもしれませんが。



「丸」の釘書き



常設展示室の府中宿町並模型

右手の甲州街道から入る長い参道（写真中央を横断）の先が国府八幡宮で、社殿は西を向く。

▼ 国府八幡宮の由来

細くて長い参道がパワースポット感を高めてくれます。途中に京王線「府中競馬正門前」駅に向かう支線の踏切もありますが、ようやくたどり着いた社殿が西側、つまり大國魂神社（武蔵総社・六所宮）を向いているのも意味ありげです。府中市八幡町に鎮座するこの国府八幡宮は、六所宮の摂社（現在は所管社）として神事が行われ、また、六所宮の神領だった八幡宿の鎮守として今も夏祭などの祭礼が続けられています。

気になるのは国府八幡宮という名前の由来です。古代の武蔵国府に関係する八幡社なのでしょうか。伝承では聖武天皇の時代に国ごとに建てられた八幡宮の一つだといえます。しかし、国分寺建立のことは有名ですが、八幡宮の話は聞いたことがなく、ちょっと信じられません。

でも、相当古い歴史を持った神社であることは確かで、中世の古文書に登場します。建治4年（1278）の「武蔵国衙年貢算用状」（金沢文庫文書）に「八幡宮神主」、嘉慶2年（1388）の「武蔵惣社般若会願文」（深大寺僧長弁『私案抄』）に「八幡宮」が見えます。いずれも武蔵総社としての六

所宮や国衙に関連のある神社を列挙したなかにあるもので、今の国府八幡宮のことと考えられます。境内から六所宮などの有力寺社と共通する中世の瓦が出土していることも、この八幡宮の格式を感じさせます。こうした国府八幡宮はいつどのように建てられたのでしょうか。

▼ 八幡信仰の歴史

全国の神社のなかでも圧倒的に数が多いのは、八幡神社だと言います。日本中どこにいても身近に感じられる「八幡様」の性格は武の神で、御利益は厄除開運・家内安全・必勝祈願などとされています。

八幡神のそもそもの発祥は、奈良時代初頭、律令国家が対外的な目的で、辺境の地に軍神として祀った宇佐八幡宮（大分県宇佐市）にあります。その八幡神は東大寺大仏造立の時に平城京に迎えられ、「鎮護国家」の神として国の重要な役割を与えられました。平安京に都が遷ると、「王城鎮護」のため石清水八幡宮（京都府八幡市）が造られ、神護寺・東寺などの有力寺院にも鎮守社として八幡神が置かれました。神功皇后が新羅出兵中に出産したと『日本書紀』に描かれている応

神天皇が、八幡神と同体とされるようになったのも平安時代初め頃です。

その後、武の神としての八幡神は、反乱を起こした平将門によって持ち上げられることもありましたが、平安時代末に武士として台頭した清和源氏が氏神として信仰してから、八幡神は新しい展開を迎えることになります。幕府を開いた源頼朝は鎌倉の中心にシンボルとなる鶴岡八幡宮を設置します。八幡神は武士たちの共通の守護神として、所領に祀られたり、石清水・鶴岡八幡宮の荘園の鎮守になったりして、八幡神社は全国に急速に広まっていきました。

以上のように、国府八幡宮の由来を考える場合も、ポイントは源氏や武士との関係にありそうです。では、武蔵以外の国で似たような名称の八幡宮はあるのでしょうか。

▼ 甲斐国の国衙八幡宮

その神社は温泉街を通り抜けた先にありました。鳥居の脇にある丸い石の道祖神が、この土地の民俗を感じさせます。石和温泉（山梨県笛吹市石和町）は、温泉の湧出こそ昭和36年（1961）と新しいのですが、街の歴史は古く、隣接する春日居（同市春日居町）に想定される甲斐国府の街場が、中世の交通の要衝にできた石和宿に遡ると言われます。

ここに鎮座する石和八幡宮は、かつて国衙八幡宮と呼ばれたことがありました。国衙とは国府のなかの役所部分のことを言います。その国衙八幡宮の名前が、南北朝時代の古文書（大善寺文書、『山梨県史 資料編 4』第618号）に出てきます。嘉慶元年（1387）、国衙留守所が「甲斐国々衙八幡宮」の法華経田職を大善寺（山梨県甲州市）に補任するという内容です。八幡宮で法華経を読経する経費に充てる四反の田が綿塚右衛門入道常法から寄進され、これの管理が大善寺に任されたのです。

大善寺は甲斐国衙の在庁官人・三枝氏が建立し、鎌倉幕府の將軍家祈祷所ともされた有力寺院です。一方、石和八幡宮は、建久3年（1192）に甲斐国守の武田氏の嫡孫・石和信光が、源頼朝の命を受けて、既存の物部神社の社頭に鶴岡八幡宮を勧請したのが起源と伝えられています（『甲斐国社記・寺記』）。国衙八幡宮が名前から連想されるように国衙の鎮守のような神社であ

れば、鎌倉時代に国衙行政に携わった武田（石和）氏または三枝氏あたりが設置に関与した可能性が考えられます。

なお、この石和（国衙）八幡宮は戦国時代の武田氏の館に勧請されて府中八幡宮と称したと言います。府中八幡宮と言えば、備後国（広島県府中市）にも同じ名前の神社があり、これは鎌倉時代に守護として下向した武士・杉原光平が建てたとされています。

▼ 国府八幡宮とは何か

他の国では、国衙八幡宮・府中八幡宮と称された八幡神社が、中世の国府に関連して存在していたことがわかりました。武蔵の場合、国府八幡宮の名称がいつから用いられているのか、意外と新しいのではないかと、という不安もありますが、国府と関わりの深い総社とこの八幡宮との関係は疑うことができません。

総社六所宮に対する累代の清和源氏のアプローチを示す伝承は豊富です。永承6年（1051）、「前九年の役」に向かう源頼義が南向きの社殿を北向きに変えたという話は、中世の『源威集』にあります。頼義と義家の父子が六所宮に苗木を寄進し、現在の「馬場大門けやき並木」の起源になったという話は有名です。源頼朝が平家打倒の戦勝祈願に奉納した矢が根付いた「矢竹の根」や、境内の摂社・宮乃咩神社の祭を始めたという伝承もあります。

武蔵府中の国府八幡宮とは何か。武蔵国府に関わった清和源氏、あるいは源氏の後を継いで鎌倉時代の武蔵国務を担当した北条得宗家あたりが、国衙の鎮守として、おそらく鶴岡八幡宮の八幡神を勧請して建てた神社である可能性が大きいのではないのでしょうか。



国衙八幡宮と呼ばれた石和八幡宮（山梨県笛吹市）

やまがち野鳥せくしょん



④一白の侵攻ー ユリカモメ

都会で勢力を振るう黒い象徴がカラスなら、現在の多摩川における黒の象徴はカワウであることをこのシリーズでも紹介しました。実はもう一種、近年の多摩川に侵攻する、今度は白い象徴とも言える鳥がいます。カラス同様、都市に増えた鳥ですが、何故か嫌われずに人気の高いユリカモメです。全長が40cm程で純白の体に嘴や足が赤く、大変綺麗な鳥です。ユーラシア大陸の北部に分布し、冬には南へと渡り越冬します。冬鳥として飛来する日本では、沿岸部の海面や河原の中洲などで暮らします。伊勢物語に登場する在原業平が隅田川で詠んだと言う、「…いざこと問はむ都鳥…」に由来して、1965年には東京都の鳥に指定されました。湾岸副都心を走るモノレールや下町で復活した和船の愛称にも使用されるほど親しまれ、都市制圧に走る悪役・カラスとは真逆の地位を確立してきた鳥というわけです。

以前のユリカモメは、まったくと言っていいほど、都民に馴染みの鳥ではありませんでした。冬鳥のため年間を通して目にすることがなかったこと、水鳥のため生息域が東京湾に偏っていたことなどがあげられます。1974年に京都の鴨川に飛来するまでは、都市に姿を現すことはありませんでした。東京でも生息範囲を拡大し、1980年代後半からは市街地や住宅地を流れる小河川でも確認できるようになったのです。特に1990年から上野の不忍池では常時姿を現すようになりました。関東地方に渡来が増えた最大原因は、増え続ける生ゴミでしょう。ユリカモメはカラスと同じく何でも食べる雑食・悪食性の鳥で、プラスチックなどまで飲み込んでしまいます。ゆえに、人が出すゴミは絶好のご馳走であり、埋立地などで発見した生ゴミには、おびただしい数が群がり、真っ白な塊を形成します。これは鳥山と呼

ばれ、遠くの仲間に餌のありかを知らせる情報伝達手段にもなっているようです。実際、昼間の東京で多数のユリカモメを見かける場所はゴミ処分場が一番で、彼らをゴミの指標鳥と見る向きもあるくらいです。結局はカラスと変わらない習性を持ち、味を占めて都市に適応した種ということになりますが、重ね重ねカラスと異なる点は、印象が良いということです。このため住民や観光客が、彼らに餌まで与える光景を目にします。投げ入れたパンなどに殺到するシーンは定番となり、時にはカモなど別の鳥に投げた餌まで、蹴散らしたり頭をつついたりして横取りする行動も見られます。河川でも水中の魚を捕食するのみならず、餌を捕らえたコサギを集団で襲って横取りする暴走ぶりです。清楚で優雅な姿は、あくまでも人の錯覚で捉えたイメージで、実は気性の激しい荒くれ集団なのです。

多摩川でも1990年代から徐々に増え始めました。河口域には数か所のねぐらも見つかっているので、日中に沿岸部から中流域を目指して侵攻を始めたのでしょうか。もちろん、常に多いわけではなく、冬鳥ゆえ主に冬季であることに変わりありません。年による個体数の増減もあります。ただ、基本カモメの仲間である鳥が、都市河川にまで入り込んでいる事実は、多摩川も例外ではないということです。一時的に汚染され、魚も逃げ出した程の多摩川も、今ではすっかり水質浄化が保たれ、豊富な魚や甲殻類が生息しています。魚食性の鳥にとっては、五つ星のレストランであると同時に、優良な滞在環境としても利用しているのだと思います。またユリカモメに限らず、近年では、セグロカモメやウミネコと言った他のカモメ連中も、同時に混ざって姿を見せつつあります。今後も新たな種類が多摩川に多く訪れることでしょう。冬の多摩川では、カワウとともにユリカモメも加わって、黒と白の顔役が河川環境を仕切っているのです。

(中村武史)



セグロカモメ(上) やウミネコ(下) までが遠征

企画展

戦国の府中

小田原北条氏の時代

4/15 (土) ~ 6/25 (日)

会場：本館 2 階企画展示室



展示会案内



高安寺出土 三十二間筋兜

府中市片町にある高安寺は、中世の文書やモノを今に伝えていて、府中の歴史を語るうえで欠くことのできない存在です。現在本館に寄託されている、兜もそのひとつです。江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』によると、この兜は境内西側の谷にある「弁慶の井」で出土したといわれています。

前立、眉庇、吹返、鞆といった付属品が失われ、頂部を大きく欠損していますが、梯形の鉄の板の片端を折り立てて、はぎ合わせた、筋兜と呼ばれるものです。井戸からの出土かどうかはともかく、表面に塗られた漆が剥げた状態や錆びた様子から、出土品であることは間違いなさそうです。

いつ頃のものが興味を惹かれるところですが、門外漢の私には太力打ちできません。しかし幸い、甲冑研究者である伊澤昭二さんが、この兜についての考察を本館の紀要に寄せてくれています（「高安寺境内伝弁慶の井戸出土三十二間筋兜鉢について」『府中市郷土の森紀要』4号 1991）。

これによると、形態や製作技法をつぶさに観察、検討した結果、室町末期の16世紀前半に常州明珍派という甲冑師の一派によって製作された兜だといわれています。しかも、かなりの高級品で、しかるべき武将が着用したものだというのです。伊澤さんはさらに論を進め、享禄3年（1530）6月、府中南東の小沢原で扇谷上杉氏と小田原北条氏が激突した際に、上杉軍の武将が落としたものと推測しています。

小田原に本拠を置き、南武蔵へ侵攻する小田原北条氏は、扇谷上杉氏と各地で軍事衝突を繰り返しました。そのひとつが小沢原合戦です。小沢原は稲城市の矢野口や押立付近のことで、府中市の南東に押立町があるように、府中とは多摩川を挟

んだ指呼の位置にあります。その南の丘陵上には小沢城があり、ここを巡る攻防が扇谷上杉氏と小田原北条氏の間で繰り返されていました。

享禄3年の6月の時点で小沢城は北条軍の掌中にあり、扇谷上杉軍の動向を監視するうえで重要な拠点になっていました。拠点である江戸城を奪われた扇谷上杉軍は、辱を注ぎと川越城を出て武蔵府中に陣を置き、対する北条氏綱は16歳になった子息・氏康を小沢城に派遣します。戦いは北条軍が圧倒し、氏康は初陣を飾るのです。

古代国府が置かれた府中は、中世においても政治拠点としての地位を保持していました。しかし、戦国期の府中は合戦の場となることはありませんでした。南北朝期以降しばらくの間、府中を巡る攻防が何度もあったのとは大きな違いです。

そうしたなか、享禄3年の小沢原合戦では、扇谷上杉軍が府中に陣を置いているのです。主戦場の小沢原は府中中心部の高安寺から4kmほどですから、戦渦に巻き込まれた可能性も十分あります。小沢原合戦は、戦国期に府中が戦いに直接関係した数少ない機会だったのです。

こうした状況を踏まえて、伊澤さんは上杉軍の武将と結びつけたのです。当時の小田原では小田原明珍派が甲冑師として活躍し、北条氏に供給していたことも、上杉勢の武将の所用であった可能性を高めます。

高安寺出土の兜は、戦国すなわち合戦の世をリアルに物語る数少ない遺品であり、北条氏の勢力の侵攻を如実に物語る遺品でもあるのです。

本企画展では、高安寺出土兜をはじめ市内に残された戦国期の史資料を展示します。（深澤靖幸）

連載『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活

『県居井蛙録』は、住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残されていた、享和2年(1802)から天保7年(1836)にいたる日々の記録です。4代当主重高と5代当主重英によって著されたこの史料には、当時の庶民の生活に関わるさまざまな出来事が記されています。本コーナーでは、毎回テーマを決めてその内容を紹介します。

『県居井蛙録』には、さまざまな出来事が記録されていますが、鎮守祭礼や講など、ご近所や村単位で行う行事のことについてはあまり詳しくふれられていません。しかし、ちょっとした記録から、その一端をうかがうこともできます。

文化7年(1810)1月7日に「間島(現 住吉町)と四谷村(現 四谷)の道祖神(道の神)の柱を立てる場所について争いがあり、双方とも、今年から別々に立てる」という旨の記録があります。ここからわかるのは、内藤家のある小野宮に隣接する間島と四谷が、正

月かざりを燃やす道祖神祭(どんど焼き、サイノカミなどと呼ばれる)を行っていたということです。

府中市域では現在でも「サイノカミ」「どんど焼き」と呼ばれる行事が数か所で行われています。1月15日の小正月頃に、竹や藁で円錐形の小屋をつくり、正月かざりを燃やす行事と、道祖神(サイノカミ)に火をささげる行事が合体したものと考えられています。藁や竹が手に入る稲作地帯に広く分布し、多摩川流域でも各地で伝承されています。府中市内では現在、押立町のものがもっとも大きく、四谷でも文化センターを会場にして行われています。

府中市域のサイノカミ行事については、江戸時代後期には存在していたことが確認されて

⑧道祖神の柱を立てる

いましたが、どのようなことを行っていたかの記録はほとんどありませんでした。しかし、小正月頃になんらかの「柱」を各集落で立てていた、ということも『県居井蛙録』から判明したのです。

この「柱」とはなんなのでしょう。おそらく「オンベラボウ(オンペラボウ)」と呼ばれるものだと思います。府中市内の聞き取り調査記録に「9～12mの丸太を立て、頂上にシメ(紙垂)をかざり、頂上より1mほど下に竹



平成27年(2015)1月、四谷で実施されたどんど焼き。竹と藁でできた小屋を燃やし、その火で団子を焼いた。

を横につけて、そこにも縄をつけてシメを下げた」という報告があります。現在府中市域でこれを立てる地域はありませんし、記憶している方に私はまだ会ったことがありません。しかし、日本各地で道祖神祭に柱を立てるという方式が伝えられており、この柱が道祖神祭の特徴の一つと考えられてもいます。近隣では、多

摩川を隔てた多摩市の一部で「オンベラボウ」がつくられ、正月かざりとともに燃やされているようです。

現在、間島では2月初午の日(はつうま)に間島神社で正月かざりをお炊き上げしています。四谷では「どんど焼き」が復活してはいますが、小屋を燃やすだけで、正月かざりを燃やすことはなくなっています。また、どちらも柱は登場しません。

道祖神の柱に関する騒動記録は『県居井蛙録』にわずかしか登場しません。しかしこの偶然記された内容から、江戸時代後期における道祖神祭祀の一部を知ることができました。それとともに、「長く伝えられてきた」とされる祭礼行事も、時代によってその方式には変遷があることもわかったのです。(佐藤智敬)